

## 『万葉集』遣唐使関連歌小考

### ——「大伴の三津の浜松」と「大伴の三津の松原」——

Research on waka poems written by the envoys to Tang China in the Manyōshū:  
“Otomo no Mitsu no Hamamatsu” and “Otomo no Mitsu no Matsubara”

岩田久美加  
IWATA Kumika

#### 要旨

憶良の『万葉集』巻一・六三歌と「好去好来歌」の第一反歌（巻五八九五）について、共通する「大伴の三津」の「松」を中心に論じる。まず、六三歌は、遣唐使として唐に派遣された人々が集い、「日本」へ「大伴の御津」へという思いが強く共通認識として持たれている場において披露され、その場の人々が唐から帰り着くべき場所が「大伴の三津」であり、そこを「家」と見立てて憶良がよんだものである。「家」には「家人」がおり、自分の帰りを待ち焦がれているはず

であるが、それは「妹」とは限らず、「妻」や「母」という場合もあるため、「大伴の三津」とともにうたによまれてきた「松」に喩えることで、遣唐使の人々がそれぞれ考える「家人」を「松」に統一し、その場の人々の心を一にしたことを明らかにした。そのようなうたをよんだ憶良は、『万葉集』巻一・八歌における齊明天皇の立場で、思いを一にさせるようなうたをよんだ額田王と同じく、執節使栗田真人の立場でよんだのであろうと考えた。また、八九五歌の「かき掃く」については、諸説あるが、憶良は遣唐使らを待っている「家人」の立場でよみ、「かき掃く」のは「大伴の三津の松原」を清浄にして、旅にある人、つまり遣唐使一

行に対して再会のための何らかの安全祈願の儀式もしくは祭祀を行うことを表現しており、予祝的な行為であることを確認した。さらに、従来憶良自身の六三歌の感慨をもとに「大伴の三津の松原」を八九五歌により込んだとされてきたが、八九四歌において「家の子と 選び給ひて」と、丹比家の子として選ばれたと規定され、遣唐使を輩出し、遣唐使関連のうたを収集・保存していただろう「文雅の家」の広成にとつては、六三歌は良く知るうたであり、「あつ！」と思わせる仕掛けでもあったと推察した。このように考えるならば、「好去好来歌」は享受者である広成に気配りした、餞のうたであったことを示唆した。

一 はじめに

山上臣憶良在大唐時憶本郷作歌

I 去来子等いざこども 早日本邊はやくやまとへ 大伴乃おほともの 御津乃濱松みつのはまつ 待戀奴良武まちごひぬらむ (①六六三)

II 好去好来の歌一首(反歌二首)

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の人もことごと 目の前に 見たり知りたり 人さには 満ちてはあれども 高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひし 家の子と 選ひたまひて 勅旨(反して、「大命」と云ふ) 頂き持ちて 唐の 遠き境に 遣はされ 罷りいませ 海原の 辺にも沖にも 神留まり うしはきいます 諸々の 大御

神たち 船の船に(反して、「ふなのへに」と云ふ) 導きまをし 天地の 大御神たち 大和の 大国御魂 ひさかたの 天のみ空ゆ 天翔り 見渡したまひ 事終はり 帰らむ日には また更に 大御神たち 船の船に み手うち掛けて 墨繩を 延へたるごとく あぢかをし 値嘉の崎より 大伴の 三津の浜辺に 直泊てに み船は泊てむ 障みなく 幸くいまして はや帰りませ (⑤八九四)

反歌

III 大伴おほともの 御津松原みつのはまつら 可吉掃豆かきはきて 和礼立待われたちまち 速歸坐勢はやかりませ (⑤八九五)

IV 難波津に み船泊てぬと 聞こえ来ば 紐解き放けて 立ち走りせむ (⑤八九六)

天平五年三月一日に、良が宅にして対面し、献るは三日なり。山上憶良謹上 大唐大使卿記室

『万葉集』中には、二十数首の遣唐使関連のうたがおさめられている。その中でIのうたは、大宝元年(七〇一)に遣唐少録として任命された山上憶良が、「大唐」においてよんだうたであり、『万葉集』中唯一の漢土でよまれたものである。Iについて、ほとんどの注釈や論考は下二句について、「大伴の三津の浜松」が「待ち恋ひぬらぬ」ととらえている。本稿では、まず、「大伴の三津の浜松」はどのような存在であったかを確認し、なぜ人でない「浜松」を「待ち恋」と表現したのかを明らかにする。あわせて同じ憶良が天平五年(七三三)三月に丹比真人人成が

遣唐大使として出発することに対して贈った「好去好来歌」Ⅱ～ⅣのⅢの「松原」との関係についても考えたい。

二 大伴の三津の浜松について

大伴の三津は、Ⅱで「大伴の三津の浜辺」、Ⅲで「大伴の三津の松原」とよまれており、それがⅣでは「難波津」とよまれている。そこから、諸注<sup>①</sup>も指摘するように「大伴の三津」は「難波津」と同じ土地としている。「大伴の三津」は他に、難波行幸時によまれた「大伴の三津の浜」(①六八)、「大伴の三津の浜辺」(⑦一一五一、⑬三三三三三)、「大伴の三津の白波」(⑪二七三七)と波をよむたもある。また、次のようないたもある。

1 天平五年癸酉の春閏三月、笠朝臣金村、入唐使に贈る歌一首(并せて短歌)

玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの  
世の人なれば 大君の 命恐み 夕されば 鶴がつま呼ぶ 難波濁  
三津の崎より 大舟に ま梶しじ貫き 白波の 高き荒海を 島伝  
ひ い別れ行かば 留まれる 我は幣引き 齋ひつつ 君をば遣ら  
む はや帰りませ (⑧一四五三)

2 大伴の 三津に船乗り 漕ぎ出ては いづれの島に 廬りせむ我 (⑮五三九六)

3 大伴の 三津の泊まりに 舟泊てて 龍田の山を いつか越え行かむ (⑮三七二二)

1は、入唐使船が出港するところとしてよまれている。『日本書紀』においては、「難波御津」「難波三津」「難波津」とあり、唐への出航の地であったと確認できる。さらに、『統日本紀』にも「遣唐四船、自難波津進発」(天平五年四月条)とあり、「天平五年癸酉、遣唐使の船難波を發ちて海に入る時に、親母の子に贈る歌一首(并せて短歌)」(⑨一七九〇)という題詞とも一致している。従って、「大伴の三津」は「難波津」と捉えても大きな問題はないと考える。さらに、2、3から遣新羅使の船が出港し、戻ってくる地としてもよまれている。従って、「大伴の三津」は公務によって日本国外への出港地であり、帰港の地であったと考えられよう。従って、Ⅰの「御津」という表記は、公的な港という意を示すものであろう。

では、その大伴の三津の浜松とはどのようなものであったのだろうか。大伴の三津に関して、「松」関連の表現をよんだものは、ⅠⅢ以外では次に掲げるものだけである。

4 朝なぎに ま梶漕ぎ出でて 見つつ来し 三津の松原 波越しに見ゆ (⑦一一八五)

5 筑紫に回り来、海路にて京に入らむとし、播磨国の家島に到りし時に作る歌五首

ぬばたまの 夜明かしも舟は 漕ぎ行かな 三津の浜松 待ち恋ひ  
ぬらむ (15)三七二一

5は「大伴の」という限定はないが、題詞より遣新羅使人が海路で入京しようとして播磨国の家島に到った時によんだものであり、先に掲げた23及び下二句がⅢと一致していることを考え合わせると、やはり大伴の三津の浜松をよんだものと考えてよい。そして4の「三津の松原」という表現は、「大伴の三津の松原」であるⅢ以外には4しかないことから、この5も大伴の三津の浜松と考えて良いかと思う。以上から、「大伴の三津の浜松」は実景として存在している。

但し、例えば、「濱松チ云ハ、待コヒヌラントイハム為也」(『代匠記精選本』)のように「待つ」を引きだすためのことばとしてとらえるものもある。また、窪田『評釈』は次のように注をつけている。

「大伴の御津の浜松」は家人といおうとして、隠喩となっている。唐にあつて従者どもと共通に本国を恋しむと、第一に思われてくるのは家人すなわち妻であるが、それを婉曲にいおうとして、御津の浜松をかりたのである。これは大御船の本国を出発する時に見た印象が深いもので、また帰朝を思うと、大御船の泊つる所のものとして思われてくるもので、譬喩として心理的妥当性のあるものである。またこの「松」は、下の「待ち」と畳語的な関係をもっているので、二句、序詞に近いものといえる。

つまり、「松」＝「待つ」と考え、「家の人が待っている」ととらえているのである。そしてそれは、出港時の松の印象によって導かれるというのである。しかし、印象だけで家人を思い出すのであろうか。結句の「待ち恋ひぬらむ」とあわせて考えたい。

### 三 「待ち恋ひぬらむ」

この句については、ほぼ注釈書に注がなく、たとえば阿蘇『全歌講義』の「待つているであろう」のように現代語訳されるのみである。ここで「待ち恋ひぬらむ」の類例を検討したい。なお古橋信孝<sup>2)</sup>は「待ち恋ひ」の「恋ひ」に関して、「恋しいの意ではなく、乞う、つまり呼び寄せる呪術とでもいいかもしれない」としているが「戀」という表記、及び「恋ふ」と「乞ふ」とではコの甲類と乙類が異なるため、この説は成立しないと考える。

6 やすみしし わご大君の 大御舟 待ちか恋ふらむ 志賀の唐崎  
(2)二五二 舍人吉年

7 玉藻よし 讃岐の国は 国からか 見れども飽かぬ 神からか  
こだ貴き 天地 日月と共に 足り行かむ 神の御面と 継ぎ来  
る 中の湊ゆ 舟浮けて 我が漕ぎ来れば 時つ風 雲居に吹く  
に 沖見れば とる波立ち 辺を見れば 白波騒く いさなとり  
海を恐み 行く舟の 梶引き折りて をちこちの 鳥は多けど

- 名ぐはし 狭岑の島の 荒磯面に 廬りて見れば 波の音の 繁  
 き浜辺を きたへの 枕になして 荒床に ころ伏す君が 家  
 知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問はましを 玉梓の  
 道だに知らず おほほしく 待ちか恋ふらむ 愛しき妻らは  
 (2)一五二
- 8 ひさかたの 天の露霜 置きにけり 家なる人も 待ち恋ひぬらむ  
 (4)六五一 大伴坂上郎女
- 9 秋風の 吹きにし日より いつしかと 我が待ち恋ひし 君そ来ま  
 せる (8)一五三三 右天平二年七月八日夜師家集會の左注あり
- 10 見まく欲り 我が待ち恋ひし 秋萩は 枝もしみみに 花咲きにけ  
 り (10)二二四
- 11 志賀の浦に いざりする海人 家人の 待ち恋ふらむに 明かし釣  
 る魚 (15)三六五三
- 12 天皇の 遠の朝廷と 韓国に 渡る我が背は 家人の 齋ひ待たね  
 か 正身かも 過ちしけむ 秋さらば 帰りまさむと たらちね  
 の 母に申して 時も過ぎ 月も経ぬれば 今日か来む 明日か  
 も来むと 家人は 待ち恋ふらむに 遠の国 いまだも着かず  
 大和をも 遠く離りて 岩が根の 荒き島根に 宿りする君  
 (15)三六八八
- 13 ぬばたまの 夜明かしも舟は 漕ぎ行かな 三津の浜松 待ち恋ひ  
 ぬらむ (15)三七二二
- 14 大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国は 敵守る おさへの城

そと 聞こし食す 四方の国には 人さには 満ちてはあれど  
 鶏が鳴く 東男は 出で向かひ かへり見せず 勇みたる 猛  
 き軍卒と ねぎたまひ 任けのまにまに たらちねの 母が目離  
 れて 若草の 妻をもまかず あらたまの 月日数みつつ 葦が  
 散る 難波の三津に 大舟に ま權しじ貫き 朝なぎに 水手整  
 へ 夕潮に 梶引き折り 率ひて 漕ぎ行く君は 波の間を い  
 行きさぐくみ ま幸くも 早く至りて 大君の 命のまにま  
 すらをの 心を持ちて あり巡り 事し終はらば 障まはず 帰  
 り来ませと 齋瓮を 床辺に据ゑて 白たへの 袖折り返し ぬ  
 ばたまの 黒髪敷きて 長き日を 待ちかも恋ひむ 愛しき妻ら  
 は (20)三七二二

全て離れているものに対して「待ち焦がれている」とよんでいる。6は  
 「志賀の唐崎」、7は「愛しき妻ら」、8は「家なる人」、9は「君」、10  
 は「秋萩」、11 12は「家人」、13は「三津の浜松」、14は「愛しき妻ら」  
 が「待ち恋ふ」対象である。ここから植物にも人間にも使用されている  
 ことが分かる。

窪田『評釈』は次のように注をつけている。

「待ち恋ふ」は、一つの語。用例の少ないものであるが、卷四(六五二)  
 「宅なる人も待ち恋ひむらむ」のように、いづれも旅にある夫の、  
 その妻に対しての心をいう語である。ここもそれである。この語に

よって、上の隠喩の心は明らかにされている。「ぬらむ」は、確かにそれと推量する意の助動詞。

つまり、離れている家人は一緒にいないつまを「待ち恋がれている」という発想に基づいているというのである。これは、羈旅歌に見られる家にいる女性が旅先の男性の安全を思っているという発想<sup>(3)</sup>に支えられての表現と言えよう。なお、Iと8と13のみが「ぬらむ」という確述の助動詞「ぬ」+推量の助動詞「らむ」という「きつと…にちがいない」という表現をもちいている。ではなぜ、わざわざ松を擬人化させたのはなぜであろうか。次章で、「いざ子ども 早く日本へ」という表現とあわせて考察する。

四 「いざ子ども 早く日本へ」について

初句について、「いざ子ども」の類歌を東茂美<sup>(4)</sup>も検討しているが次に載せて確認する。

15 いざ子ども 大和へ早く 白菅の 真野の榛原 手折りて行かむ  
 参考 a 白菅の 真野の榛原 行くさ来さ 君こそ見らめ 真野の榛原  
 (3)二八〇 高市連黒人

16 羈旅の歌一首（并せて短歌）

(3)二八一 高市連黒人の妻

海神は くすしきものか 淡路島 中に立て置きて 白波を 伊予に廻ほし 居待月 明石の門ゆは 夕されば 潮を満たしめ 明けされば 潮を干れしむ 潮さゝるの 波を恐み 淡路島 磯隠り居ていつしかも この夜の明けむと さもらふに 眠の寝かてねば 瀧の上の 浅野のきぎし 明けぬとし 立ち騒くらし いざ子ども あへて漕ぎ出む にはも静けし  
 (3)三八八 作者未詳 若宮年魚麻呂誦む

17 いざ子ども 香椎の潟に 白たへの 袖さへ濡れて 朝菜摘みてむ  
 退り帰る時に、馬を香椎の浦に駐めて、各懐を述べて作る歌  
 帥大伴卿の歌一首  
 (6)九五七

18 白露を 取らば消ぬべし いざ子ども 露に競ひて 萩の遊びせむ  
 (10)二七三

19 天平宝字元年十一月十八日に内裏にして肆宴したまふ歌二首  
いざ子ども 狂わさなせそ 天地の 堅めし国ぞ 大和島根は  
 (20)四四八七 内相藤原朝臣

参考 b 天地を 照らす日月の 極みなく あるべきものを 何をか思はむ  
 (20)四四八八

20 いざ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに 我が行く道の…  
 (応神記四四)

「いざ子ども」は「さあ、みんな！」とその場にいる人々に対して何らかのことを呼びかけている表現であることは明らかである。15は参考aにあげた二七九歌と合わせてみると、我妹子と一緒にの旅として『万葉集』においては配列されており、妻に対して「手折りて行かむ」と呼びかけている。16は、船旅であり、その乗船メンバーに対して「あへて漕ぎ出む」と呼びかけている。17は、題詞にあるように大宰の官人たちと香椎宮に参拝した時のものであり、大宰の官人たちに一行の統率者である帥の旅人が「朝葉摘みてむ」と呼びかけている。18は、「萩の遊びせむ」と呼びかけたものであるが、「萩の遊び」とは次のようなうたが参考になる。

・ 秋風は 涼しくなりぬ 馬並めて いざ野に行かな 萩の花見に

(⑩二一〇三)

・ 我がやどの 萩咲きにけり 散らぬ間に はや来て見べし 奈良の里人

(⑩二二八七)

・ 我が衣 摺れるにはあらず 高松の 野辺行きしかば 萩の摺れるそ

(⑩二二〇一)

・ さ額田の 野辺の秋萩 時なれば 今盛りなり 折りてかささむ

(⑩二一〇六)

前栽や野辺に開花した萩を、愛でながら触れ合う遊びを言うのだろうと指摘<sup>5)</sup>がある通りであろう。従って、萩を見て楽しむ相手に対して「萩

の遊びせむ」と呼びかけたのである。19は、内裏での宴の場で、参考bにあげたように皇太子である大炊王が「何をか思はむ」とよんだのをうけて、藤原仲麻呂が宴の参加者に「狂わざなせそ」(「たわけたことを言うな」と禁止を呼びかけたものである。また、20は『古事記』(応神天皇条)の歌謡であるが、『古事記』の中では、応神天皇が、髪長比売を乞うた大雀に歌いかけた設定になっている。なお、歌謡の表現から推測すると、諸注<sup>6)</sup>が指摘するように、「野萩摘み」などの野遊びなどで歌われたものである。従って、その場にいる人に「野萩摘みに」といざなったのである。以上より、『万葉集』および『古事記』の歌謡の中の用例は全て、具体的な行動をいざなう意志または禁止を伴う表現がうたのなかにあるが、当該歌は、有していない。もちろん、諸注<sup>7)</sup>は、「帰らむ」の意をこめていているとしている。そのことを考え合わせると、当該歌は東前掲論文<sup>8)</sup>が指摘するように、「いずれも(稿者注：15～19をさす)官人たちの間でうたわれているのをみれば、それぞれ古歌謡から継承されたものである」と言えるのかもしれない。ただ、Iは、表現を古歌謡から継承するだけでなく、具体的な行動を表現しておらず、場に対する依存度が高いうたである。それが可能なのは、その場にいる人々と思いの共通性が高いために、具体的な行動を省略しても理解が可能だったのではないだろうか。つまり、「日本」へ「大伴の御津」へという、思いが強く共通認識として持たれている場において披露されたものと考えられよう。すると、その場の人々が唐から帰り着くべき場所が「大伴の三津」であり、そこを「家」と見立ててよんだのがIであろう。従って、「家」

には「家人」がおり、自分の帰りを「待ち焦がれている」はずである。しかし、それは「妹」とは限らず、「妻」や「母」という場合もあるだろう。従って、それを大伴の三津にのみこまれてきた「松」に喩えることで、遣唐使の人々のそれぞれが考える「家人」を「松」に統一することになり、その場の人々の心を一にしたと考えられる。それが可能だったのは、もちろん澤瀉注釈などが出港時に「印象的な松」と指摘する通りではあるが、それだけではなく、常緑で不変であるということとにも、もともと松という植物は次にあげるように人間に喩えることができる素地があったと考えられよう。

21 岩屋戸に 立てる松の木 汝を見れば 昔の人を 相見ることし

(③三〇九)

22 君来ずは 形見にせむと 我が二人 植ゑし松の木 君を待ち出で

(①二四八四)

23 松の木 の 並みたる見れば 家人の 我を見送ると 立たりしもこ

(②〇四三七五)

21のように松の木から昔の人を思い出すとよむうたや、22のように、「二人で植えた松」が「君」を待っているという発想のうたがあった。さらに、23のうたは、松の木から家人の見送りの姿を連想するうたであり、「松」は旅立ちの時に見送る家人を思い起こすものであった。従って、これらを参考にすると、Iは「松」に関するそれぞれの愛する人や家人

との思い出を背負いながら、同音で「待つ」を序詞的に導きだしているといえよう。そして個々の思い出に関する「松」を「大伴の三津の浜松」で一にし、遣唐使一行のそれぞれの家人にまとめあげたのである。そのように考えると、

5 ぬばたまの 夜明かしも舟は 漕ぎ行かな 三津の浜松 待ち恋ひ

ぬらむ (⑮三七二二)

再掲した5は、遣新羅使人の思いをまとめて「三津の浜松」としており、好去好来歌の影響をうけてよまれたものであろう。

ところで、山上憶良はどのような立場でこのうたをよんだのだろうか。具体的には次の歌が参考になる。

24 熟田津に 舟乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出で

な (①八 額田王)

24は、百済救済のために大和朝廷の軍団が、熟田津に停泊し、出帆する折によまれたうたであり、一行を統率する斉明天皇の立場で額田王が「さあ漕ぎだそう」とその場の人々を出帆へといざなうたをよんだと解されているが、その額田王と同じように、憶良はIを一行を率いる遣唐使節使である粟田真人の立場でよんだものと思われる。

五 「我立ち待たむ はや帰りませ」について

Ⅲについて、まず上三句の表現を検討する前に、どのような立場でよまれたかを明らかにするために、上野誠<sup>9)</sup>や菊池義裕<sup>10)</sup>も検討しているが、ここで結句の表現を確認したい。

Ⅱと同じ「はや帰りませ」というⅢの結句の類例には次のようなうたがある。

25 天平五年癸酉の春閏三月、笠朝臣金村、入唐使に贈る歌一首（并せて短歌）

玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの  
世の人なれば 大君の 命恐み 夕されば 鶴がつま呼ぶ 難波潟  
三津の崎より 大舟に ま梶しじ貫き 白波の 高き荒海を 島伝  
ひ い別れ行かば 留まれる 我は幣引き 齋ひつつ 君をば遣ら  
む はや帰りませ (⑧一四五三)

26 荒津の海 我幣奉り 齋ひてむ はや帰りませ 一面変はりせず (⑫三二一七)

27 大舟を 荒海に出だし います君 障むことなく はや帰りませ (⑮三五八一 古歌)

28 天平五年、入唐使に贈る歌一首（并せて短歌）「作り主未だ詳らかならず」  
そらみつ 大和の国 あをによし 奈良の都ゆ おし照る 難波に

下り 住吉の 三津に船乗り 直渡り 日の入る国に 遣はさる  
我が背の君を かけまくの ゆゆし恐き 住吉の 我が大御神 船  
の舳に うしはきいまし 船艫に み立たしまして さし寄らむ  
磯の崎々 漕ぎ泊てむ 泊まり泊まりに 荒き風 波にあはせず  
平けく 率て帰りませ もとの朝廷に (⑲四二四五)

25はⅢと同じく入唐使に対して金村が贈ったうたであり、「我は幣引き齋ひ」ながらいたというのであり、それで「はや帰りませ」とうったえるのである。また27は遣新羅使人である「君」にたいして「はや帰りませ」とうたである。また贈答であることから、

29 ま幸くて 妹が齋はば 沖つ波 千重に立つとも 障りあらめやも (⑮三五八三)

27と対になる29で妹が「齋はば」とあることから、家で潔齋をしているならば無事であるというので、その前の27は妹が「君」に対して呼びかけたうたということがいえよう。また、26は旅先にいる相手に対して「我幣奉り齋ひ」ているから早く帰ってきて欲しいという25と同じ発想のうたである。そして28は、25と同じ入唐使に贈る歌であり、発想としては同じである。そうすると、Ⅲも家にいる妹など家人の立場で旅先の相手に早く帰ってきて欲しいといううたである。つまり、憶良が家にいる家人の立場でよんだうたということになる。

次に、上野誠<sup>(11)</sup>も検討しているが、「立ち待つ」とはどのような意味かを確認する。

30 一重山 隔れるものを 月夜良み 門に出で立ち 妹か待つらむ

(④七六五)

31 道の辺の 草を冬野に 踏み枯らし 我立ち待つと 妹に告げこそ

(⑪二七七六)

30 31のように、「立ち待つ」のは男女とも行う行為であるが、「立って待つ」くらい相手への思いが強いことを表わす表現である。これを踏まえてⅢについて考えるならば、「大伴の三津の松原を「かき掃きて」、今か今かと立って待っていますから早くお帰りになってください」と表現しているのである。

では、なぜ「大伴の三津の松原」を「かき掃」くのか、次章で検討する。

## 六 「大伴の 三津の松原 かき掃きて」について

諸注、「かき掃きて」については、ほぼ「掃き清めて」という注や訳をつけるにとどまっている<sup>(12)</sup>。ところで、中西進<sup>(13)</sup>はこの「かき掃く」に関して、独自の見解を述べている。

32 太上皇、難波宮に御在しし時の歌七首「清足姫天皇なり」

左大臣橘宿祢の歌一首

堀江には 玉敷かましを 大君を み舟漕がむと かねて知りせば

(⑱四〇五六)

御製の歌一首(和へ)

33 玉敷かず 君が悔いて言ふ 堀江には 玉敷き満てて 継ぎて通は

む(或は云ふ「玉扱き敷きて」)

(⑱四〇五七)

右の二首の件の歌は、御船江を浜り遊宴する日に、左大臣の奏する、并せて御製なり。

この二首をもとに「賓客を迎えるときの礼儀として玉を敷く、かき掃く、ということであろう。しかしその美しくしつらえるということの上には、憶良の歌には「御津の松原」という存在が重くかかっているのを感じる。清浄に―その万葉人にとつて「清」に、松原を保ちつつ待つということには、根底に右に見てきたような景の生命感が在しないだろうか。」と述べている。それを踏まえて、上野誠<sup>(14)</sup>は、「玉を敷く」という行為を、来訪者への気持ちを表すならば、「大伴の 三津の松原 掻き掃きて」も同じであろう。」とし、大仰な表現であり、実際にはあり得ないことを前提としているとし、自らを「待つ女」に仮構して、「港を妹の家と見立て」て、「大伴の三津を掻き掃く我」憶良は、床を清掃して背の帰りを待つ妹を想起させるもの」であるとしている。それに対して、菊池義裕<sup>(15)</sup>は、「大伴の御津の松原」を「港」に解することについて、「夫が

出港時に目にし、遠く離れていても思い出さずにはいられない「大伴の御津」ゆかりの景、それが「大伴の御津の松原」で、「夫を迎える景として見るべき」とし、その上で「かき掃く」を「掃き清める」ことであるが、中西進の先の論考<sup>(16)</sup>に続けて「清なる御津の松は、「栄えてあり待つもの」であるとの指摘をうけて、「栄えてあり待て」や「幸くあり待て」をよんだうたを検討し、それらのうたは「帰り来」ることをよむうたがあり、「幸くあらば」「ま幸くあらば」などの表現は、「またもかへり見む」「またも見む」と呼応しており、土地は待つものにとつて大切な場所となり、「幸く」あるように、旅立ちの時と同じようにあるように保つという発想が生まれ、Ⅲにおける「かき掃く」のは、「広成たちが出発に際して目にする「大伴の御津の松原」の景を、その折と同様に清浄に保つ行為」であり、「客人を迎えるための直接的な清掃の行為ではあるまい」とし、

34 櫛も見じ 屋内も掃かじ 草枕 旅行く君を 齋ふと思ひて「作者未だ詳らかならず」

(19)四二六三 伝誦するひと大伴宿祢村上同じ清継ら

と同様の「無事を念じての「齋ひ」の行為」だとしている。しかし、34では「掃く」と同じ動詞を用いながら「掃かじ」と否定して、「掃か」ないこと、つまり、「手を付けない」ことを「齋ひ」であるとしている。それでありながら「かき掃く」ことが「清浄を保つ」ことを意味し、「齋

ひ」というのは難しいのではないか。

ここで集中の「掃く」の用例を確認しておく。

35 ……山川を 岩根さくみて 踏み通り 国まぎしつ つ ちはやぶる

神を言向け まつろはぬ 人をも和し 掃き清め 仕へ奉りて

…… (20)四四六五 大伴家持

36 天平十八年正月、白雪多く零り、地に積むこと数寸なり。ここに左

大臣橘卿、大納言藤原豊成朝臣また諸王諸臣たちを率て、太上天皇の御在所「中宮の西院」に参入り、仕へ奉りて雪を掃く。ここに詔を降し、大臣参議并せて諸王らは、大殿の上に侍はしめ、諸

卿大夫らは、南の細殿に侍はしめたまふ。而して即ち酒を賜ひ肆宴したまふ。勅して曰く、汝ら諸王卿たち、聊かにこの雪を賦して、

各その歌を奏せよ、とのりたまふ。(17)三九二二題詞

35は、「まつろわぬ人」を「和らげ」て「掃蕩し鎮撫する」<sup>(17)</sup>ことであり、

36は雪の日に太上天皇の御在所で雪掃きをしている描写である。ここから「かき掃く」は「邪魔なものを払う」「掃除をする」ことを意味する。

従って、これも「大伴の三津の松原」から「邪魔なものを取り除く」という意である。それでは、「邪魔なものをとりのぞ」いて「家人」が

帰りを待つとは、何を意味しているのだろうか。待っている「家人」の行為を確認する。

25 天平五年癸酉の春閏三月、笠朝臣金村、入唐使に贈る歌一首（併せて短歌）

玉だすき かけぬ時なく 息の緒に 我が思ふ君は うつせみの  
世の人なれば 大君の 命恐み 夕されば 鶴がつま呼ぶ 難波潟  
三津の崎より 大舟に ま梶しじ貫き 白波の 高き荒海を 島伝  
ひ い別れ行かは 留まれる 我は幣引き 齋ひつつ 君をば遣ら  
む はや帰りませ (8)一四五三

26 荒津の海 我幣奉り 齋ひてむ はや帰りませ 面変はりせず (12)三二二七

37 天平五年癸酉、遣唐使の船難波を発ちて海に入る時に、親母の

子に贈る歌一首（併せて短歌）  
秋萩を つま問ふ鹿こそ 一人子に 子持てりといへ 鹿子じもの  
我が一人子の 草枕 旅にし行けば 竹玉を しじに貫き垂れ 齋  
瓮に 木綿取り垂でて 齋ひつつ 我が思ふ我が子 ま幸くありこ  
そ (9)一七九〇

再掲した25は入唐使に贈るうたであるが、「我は幣引き 齋ひつつ 君をば遣らむ」と「齋ひ」を行い、同じく再掲した26も旅に出た人を「我幣奉り 齋ひてむ」と「齋ひ」をしている。また37の遣唐使の母は、「竹玉を しじに貫き垂れ 齋瓮に 木綿取り垂でて 齋ひ」をしている。そして、37には「齋瓮に 木綿取り垂で」ることが記されているが、それは、次のような用例が参考になる。

38 草枕 旅行く君を 幸くあれと 齋瓮据まつ 我が床の辺に (17)三九二七 大伴坂上郎女

39 ……大君の 命のまにま ますらをの 心を持ちて あり巡り 事  
し終はらば 障まはず 帰り来ませと 齋瓮を 床辺に据ゑて  
白たへの 袖折り返し ぬばたまの 黒髪敷きて 長き日を 待  
ちかも恋ひむ 愛しき妻らは (20)四三三一 大伴家持

38 39から、「齋瓮」を据えるのは床の辺りであり、37でその行為を行っているのは遣唐使の母であるから、家人であれば行うことであろう。上野誠<sup>(18)</sup>の、「旅行中の家人の祭祀に関わること」との指摘を踏まえれば、安全祈願の儀式もしくは祭祀であると言えよう。そして、そのような祭祀を行う「床」については、次のように「床打ち払ひ」と表現し、「床を清浄にする」行為が集中にいくつもある。

40 ま袖もち 床打ち払ひ 君待つと 居りし間に 月傾きぬ (11)二六六七

41 大伴宿祢家持、坂上大嬢に贈る歌一首（併せて短歌）  
ねもころに 物を思へば 言はむすべ せむすべもなし 妹と我と  
手携はりて 朝には 庭に出で立ち 夕には 床打ち払ひ 白たへ  
の 袖さし交へて さ寝し夜や… (8)二六二九  
42 我が背子は 待てど来まさず 天の原 振り放け見れば ぬばたま  
の 夜もふけにけり さ夜ふけて あらしの吹けば 立ち待てる

我が衣手に 降る雪は 凍り渡りぬ 今更に 君来まさめや さな  
 かづら 後も逢はむと 慰むる 心を持ちて ま袖もち 床打ち払  
 〇 現には 君には逢はず 夢にだに 逢ふと見えこそ 天の足る  
 夜に (13三二八〇)

40は「床を打ち払」って「君」を待つ女、42は40と同じ「ま袖もち床打ち払ひ」という表現をもちいて、「君」を待っているが逢うことが出来なかつた女が描かれている。ここから、女は「床打ち払」って、つまり「床を清めて」男を待つことが分かる。それについて、小島憲之<sup>(19)</sup>は次の『玉台新詠』の詩との関係を指摘している。

43 (前略)

洒掃清枕席	鞆芬以狄香	洒掃枕席を清め、鞆芬狄香を以ゆ。
重戸結金扇	高下華燈光	重戸金扇を結び、高下燈光華やかなり。
衣解巾粉御	列圖陳枕張	衣解かれ巾粉を御し、圖を列ねて陳枕張らる。

素女為我師 儀態盈萬方  
 素女を我が師と為し、儀態萬方盈つ。  
 (後略) (張衡「同聲歌一首」)

43の「洒掃枕席を清め」る動作を41の「夕には 床打ち払ひ」と関係があるとし、『玉台新詠』の「種葛」の「歡愛在枕席 宿昔同衣裳」という表現から、単に床を清潔にして待つという意ではなく、男女の「合歡」

の前のわざとしてする動作であり、「実際に『万葉集』の歌人たちが行った行為」ではなく、「むしろ書物から得た表現が、イデオム化して万葉歌人の世界に流行した」と想定し、「床うち拂ひ」は、もともとは男女の「合ひ」に關係する語としてしている。これを踏まえるならば、「床」を「打ち払」って清浄にすることは、男が来てくれるように願うような儀式、もしくは祭祀を意味する成句としてあつたとも考えられよう。そこからさらに考えると、38 39の「齋瓮を床の辺りに据」えて清浄な状態にして、旅にある人が無事に帰って来て再び「合う」ことができるように「家人」が祈る祭祀であつた<sup>(20)</sup>とはいえよう。

このように見てくると、Ⅲにおいて憶良は遣唐使らを待っている「家人」の立場でよんでいるのだから、「かき掃く」のは「大伴の三津の松原」を清浄にして、旅にある人、つまり遣唐使一行に対して再会のために何らかの安全祈願の儀式もしくは祭祀を行うことを表現していると考えられよう。そうすることで、遣唐使たちの無事の帰国を迎えることが可能になるのと考ええる。そのような意味では、村山出<sup>(21)</sup>が指摘し、橋本達雄<sup>(22)</sup>も賛同する「ここでは神の加護を得た大使の船を迎える儀礼的表現」と重なるものがある。

七 まとめにかえて

以上から、次のようなことが言えよう。Ⅰは題詞から、憶良が遣唐小録として唐にいた時に、よんだうたであつた。それは遣唐使として唐に

派遣された人々が集い、「日本」へ「大伴の御津」へという、思いが強く共通認識として持たれている場において披露されたものであった。そのため、その場の人々が唐から帰り着くべき場所が「大伴の三津」であり、そこを「家」と見立ててよんだのがⅠである。従って、「家」には「家人」がおり、自分の帰りを「待ち焦がれている」はずである。しかし、それは「妹」とは限らず、「妻」や「母」という場合もある。従って、それを「大伴の三津」とともによまれてきた「松」に喩えることで、遣唐使の人々のそれぞれが考える「家人」を「松」に統一し、その場の人々の心を一にしたと考えられる。そして、そのようなたをよんだ憶良は、百済救済のために大和朝廷の軍団が、熱田津に停泊し、出帆する折に一行の統率者である齊明天皇の立場で24「熱田津に舟乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」(①八)と、対外意識が強く働き、思いを一にさせるようなたをよんだ額田王と同じく、遣唐使一行を率いる執節使粟田真人の立場に立っていたであろうと考えた。

また、Ⅲの「大伴の三津の松原」を「かき掃く」ことについては、諸説あったが、集中の用例を検討した結果、憶良は遣唐使らを待っている「家人」の立場であるから、「かき掃く」のは「大伴の三津の松原」を清浄にして、旅にある人、つまり遣唐使一行に対して再会のために何らかの安全祈願の儀式もしくは祭祀を行うことを表現している。それは、遣唐使たちの無事の帰国を迎えることを可能にする予祝的な行為であった。

ところで、ⅠとⅢのうたでは、制作年が二十九年も隔たりがある。そ

れでもこの二首の「松」と「松原」については、同じ憶良の作品であることから、何らかの関連があるものであることが前提として論じられている。例えば、橋本達雄<sup>(23)</sup>は、Ⅲを論じるにあたり、「憶良が唐土にあって日本を憶い、(Ⅰのうた引用)と第一に思いをさせた忘れがたい風景であった。胸中には必ずやこの歌が感慨深く去来していたに違いない」としている。また川口常孝<sup>(24)</sup>はⅢについて、「大伴の御津の松原」といい「早帰りませ」といい、みずから二十九年前の心意を裏返しにしてうたっているもの」とする。また、上野誠<sup>(25)</sup>はⅢについて「その松原は、おそらく海上からもあざやかに見えたので、出港時には「見送りの松」に、帰港時には「出迎えの松」になったのであった。見送りの松として海上から名残りを惜しめばこそ、その出迎えを受けたいと願ったのであろう」としている。

確かに、憶良にとつてはそのような心境があったかもしれない。ここで、そのような「大伴の三津」の「松」を詠み込むことは、どのような意図があったのかを少し考えてみたい。

ⅡⅣの「好去好来歌」は、天平五年三月に「大唐大使卿」つまり丹比広成に謹上されたものであった。この広成の父である嶋は、持統・文武朝において大臣をつとめ、兄の畠守は養老元年の遣唐押使となっていた。また、憶良が筑前国守の時にも、畠守も正四位上大宰大弐として同じく筑紫にあった。その意味では、筑紫歌壇における旅人や憶良の作品享受者の一人だったと<sup>(26)</sup>の指摘もある。

ところで、「古き挽歌一首」(⑥三六二五)との題詞を有する古歌の左

注には「右、丹比大夫、亡き妻を懐愴く歌」とあるが、桜井満<sup>(2)</sup>は、挽歌であるにもかかわらず、危険な航海の途次によまれたものであり、丹比家の「古き挽歌」は人々に知られた古歌であったと指摘する。さらに、菊池義裕<sup>(28)</sup>は、集中には題詞に「丹比真人」とのみ記し、その名を伝えないうたが多くあることを踏まえて、丹比家に伝承されたうたであっただろうとし、「丹比家は古歌を伝承する家柄」でもあり、「嶋以来の名門丹比家は、〈文雅の家〉と呼ぶにふさわしい存在」であるとす。これらの説は、推測の部分も多いが、遣唐使を出す家であり、集中多くの丹比家の人のうたが残されていることから考えると、古くからの遣唐使関係のうたを保存していたとしても不思議ではなく、その中には憶良のⅠのうたも含まれており、『万葉集』にはうたは残さないが『懷風藻』に詩三首を残していることから文学に造詣が深かったであろう広成にとつてはよく知るうたの一首だったのではないか。そのような環境で育った広成がすぐに気づくⅠを踏まえて、憶良はⅢで「大伴の三津の松原」をよみ込んだのではなからうか。従って、従来憶良自身のⅠの感慨をもとにⅢによみ込んだといわれてきたが、それにあわせて、Ⅱにおいて広成の遣唐大使任命を「家の子と 選び給ひて」と、丹比家の子として選ばれたと憶良によって規定されている広成にとつては、「あつ！」と思わせる仕掛けでもあったのではなからうか。二十九年前には、憶良自身が唐から帰る時に「日本」に帰るために目指した「大伴の三津の浜松」を、「日本」にいる憶良自身がその「松」がある「松原」を祭祀の場として自分の帰国を願っていてくれるのだから、広成は自分もその「松」を目

指すことで同じように無事に帰れるのだと感じたであろう。そのように考えるならば、Ⅱ～Ⅳは享受者である広成に気配りした、饒のうたであった可能性を考えることができるのではないか。

## 注

- (1) 近年の多くの注釈書、例えば『新編全集』など。
- (2) 古橋信考「松と待つ」『短歌』十月号 平成三年九月
- (3) 神野志隆光「行路死人歌の周辺」『柿本人麻呂研究』（塙書房）一九九二年四月など。
- (4) 東茂美「憶良の帰去来」『山上憶良の研究』（翰林書房）二〇〇六年一〇月
- (5) 東茂美(4)論文及び古橋信考「郊外論」『古代都市の文芸生活』（大修館書店）一九九四年参照。
- (6) 土橋寛「古代歌謡全注釈（古事記編）」（明治書院）一九七二年一月など。
- (7) 伊藤博「万葉集釈注三」など。
- (8) 東茂美(4)論文
- (9) 上野誠「大伴の三津の松原掻き掃きて」再考―好去好来歌反歌の論―『京都語文』二〇一五年
- (10) 菊池義裕「好去好来歌」の性格『美夫君志』第九十八号 平成三十一年四月
- (11) 上野誠(9)論文
- (12) 但し、『代匠記』（精撰本）は、『史記』孟子荀卿列伝の「趨衍如燕昭王擁彗先驅」と引用し、趨子が燕の国に行った時には、昭王が自ら彗（＝箒）を持って先に行き、弟子の座に着いたという例を挙げている。しかし、これを典拠にして憶良がこのうたを制作したとは考えづらい。

- (13) 中西進「遣唐使に餞る」『山上憶良』（河出書房新社）一九七三年  
 上野誠(9)論文
- (14) 菊池義裕(10)論文
- (15) 中西進(13)論文
- (16) 『新編全集』四四六五歌頭注。
- (17) 上野誠「人麻呂挽歌の枕と床」『古代日本の文芸空間―万葉挽歌と葬送儀礼』（雄山閣出版）一九九七年
- (18) 小島憲之「萬葉集と中国文学との交流」『上代日本文学与中国文学 中―出典論を中心とする比較文学的考察―』（塙書房）一九六四年
- (19) なお上野誠(9)論文も小島憲之(19)論文を引用し、検討しているが、具体相を考えており、本論とは異なる。
- (20) 村山出『大伴旅人 山上憶良』（新典社）昭和五十八年
- (21) 橋本達雄「山上憶良の好去好来歌」『万葉集の時空』（笠間書院）二〇〇〇年
- (22) 橋本達雄(22)論文
- (23) 川口常孝「『いざよひ』も早く日本へ」歌の背景」『人麿・憶良と家持の論』（桜楓社）平成三年
- (24) 伊藤博『万葉集积注三』⑤八九二歌解説
- (25) 上野誠(9)論文
- (26) 桜井満『現代語訳対照 万葉集（下）』補注（旺文社）一九七八年
- (27) 菊池義裕「憶良と丹比家―〈好去好来歌〉の献呈―」『上代文学』第五十三号 昭和五十九年十一月
- (28)

※ 本文は『CD-ROM万葉集』（塙書房）に、『古事記』は『新編日本古典文学全集』（小学館）のそれに、『玉台新詠』は『新釈漢文大系』（明治書院）のそれによった。但し、一部私に訓を付し、字を改めたところがある。